

# 血液型による人間の特性分類の検証と 学生への人間科学教育

中 村 廣 光

An Examination of the Classification of Characters by Blood Type  
and the Scientific Education about Human Beings

Hiromitsu NAKAMURA

## I はじめに

心理学関連の講義を担当している教員として、学生の傾向に由来から折に触れて気にかかることがあった。それは、入学して間もなく様々な場面で繰り返される自己紹介、学生同士の日常の人間関係の中で交わされる自己や他者に対する人物評価、合宿など人間関係が濃厚になった段階で行われる自己や他者の性格分析の折りなどに必ずと言っていいほど口をついて出てくる「血液型による人物評価」のことである。

心理学の授業の中で、性格類型や性格検査等を講義する時に、血液型性格診断は科学的根拠がないことに通りふれ、研究者の論評などのプリントを配布するなどして偽科学の迷妄に陥らないように注意を促すことを心掛けてきた。

しかし、この問題は根深く、コマーシャルズムに乗って、繰り返し雑誌の記事として特集されたり、単行本として刊行され、「血液型性格診断」は若者の間では人間を理解する上での新しい常識となっている感が否めない。

そこで、血液型による人間の特性分類ができるのかどうかを学生の目の前で明らかにできる方法を考案し、実際に試行してみたので、その結果を公表すると共に、血液型による人間の分

類に信頼性があるのかどうかを検証した。

## II 血液型と性格類型研究の概観

人間の諸特性の分類に関しては、古くはギリシャ時代から人間の性格と体型が関連づけられて考えられていた。それについての科学研究を初めて行ったのはドイツの精神医学者クレッチマーである。彼は多くの精神病患者を診察した体験から性格と体型との間には一定の関係があることに気づき、3つの代表的な精神病と体型との関連を検証した。これが性格類型論の始まりである。その後、スイスの心理学者ユングによる精神分析的な視点からの心の深層にある向性に着目した性格類型論やアメリカの心理学者オルポートやギルフォードによる性格を要素に分けて分類する特性論へと発展し、現在の心理検査の基礎を形成している。

最近では、従来分類されてきた性格特性を最新の科学技術と理論で解析して、人間の思考や行動傾向を決定する「ビッグファイブ」と呼ばれる5つの核となる性格特性因子が抽出され、医学・心理学分野における科学的性格特性論はここに収束した感がある。

血液型による性格類型論は、1900年代初頭にオーストリーのラントスタイナーとその弟子達

によってABO式血液型が発見されて間もない1916年、日本赤十字社勤務の原、小林という二人の医師による論文「血液の類属的構造について」の中で血液型と体型・性格特性に言及したのが初めである。その後陸軍医による兵士の諸特性と血液型の関連についての研究が行われ、1927年、東京女子高等師範学校教授の古川竹二によって今日の血液型性格類型論の原型となる「血液型による気質の研究」が発表された。

古川の研究は、今日の血液型性格診断に見られるような血液型と職業、結婚などの適否を判定する手がかりを提供するという実用的な展開を遂げながら、軍部や政治・経済界の人事にまで影響を与える学説となっていった。(外交官はO型の血液型に限るとの建白書を外務大臣に提出：1937年)

しかしその時期、軍の用兵を的確に行うための要請から軍医達によって行われた血液型と用兵上の兵士の特性との間の実証的類型化の研究は、古川説の信頼性や妥当性等に関する基本的な問題を露呈させる結果となり、1933年の日本法医学で「現代人に迎合された一つの大いなる錯覚であると断定することができる」(守安)と批判された。

その後、古川学説は軍の用兵研究に有効な方針を示し得なかったことや理論的矛盾を抱えた類型論であったために急激に消退の運命をたどることとなった。

ところが、それから50年余り経った1980年頃になって能見正比古による「血液型人間学」なる古川説の焼き直し普及版ともいえる血液型による人間のタイプの分類法が再登場した。その後、息子の能見俊賢、鈴木芳正等によって、既に省みられることもなかった古川の血液型性格類型論が新しい装いを施され、マスコミを通じてそれ等が新しい「人間学」であるかのように世の中に流布され、ブームとなり、人間特性を判断する規準の一つとして一部の人に信奉されている。しかし、これらの説に対しては、大村(日本大学)や長谷川(岡山大学)、坂元(お茶の水女子大学)等の心理学者を中心に厳密なデータの検証と追調査がおこなわれ、理論的

基盤や信頼性、妥当性についての批判が行われている。

本研究では、古川学説から能見、鈴木に至るまでの従来の血液型-気質-性格の相関を「真っ赤なウソ」として否定し、実は血液型と思考パターン(モノの考え方の傾向)に相関があるのだと提唱して、『怖いくらい当たる「血液型」の本』(三笠書房：2005年初版発行)が出版され、ベストセラーとなっている長田時彦の血液型による特性分類の検証を試みる。

### Ⅲ 研究方法

#### 1. 研究対象

2009年度前期～後期にかけて、心理学関連授業(「心理学」、「発達心理学」、「教育心理学」、「精神保健論」)を受講した学生の内、本調査研究に協力する意思表示があった学生。

Iグループ：初等教育科2年次学生 (教育心理学受講者)	81名
IIグループ：保育科一年次学生 (発達心理学受講者)	43名
IIIグループ：食物栄養科二年次生 (心理学受講者)	36名
IVグループ：初教専攻1年次生 (精神保健論受講者)	10名
Vグループ：大学院臨床心理専攻 (心理査定演習受講者)	11名
合計	181名

#### 2. 調査方法

長田時彦著『怖いくらい当たる「血液型」の本』に記述されている、A、B、O、AB式血液型に対応する4つの思考パターン(類型)の内容を、それぞれ8項目ずつ抽出して、a、b、c、dに分け、その特性を記述した「性格類型診断テスト」用紙を作成した。

心理学関連授業の中で、性格類型などを扱う授業時間に、「性格タイプの信頼性を確かめるテストを試みる」旨のみを学生に伝え、それぞれの質問に◎、○、△、×の4段階評価で回答してもらった。(参考資料参照)

この時点では、a、b、c、dの分類は血液型思考タイプによるものであることはブラインドしている。a、b、c、dの小計点数の中で最も高得点をとった項目と自身の血液型とを対比させ、それぞれが回答した結果を黒板に〈表1〉の形式の一覧表に整理し、血液型によって分類された思考パターンによる人間の分類と実際の血液型がどれくらい一致するかを即時的に検証した。

しかる後、学生の回答結果を論文にまとめ、発表することについて同意できる者のみ、「性格類型診断」用紙の回収に応じてもらいたい旨伝えて、同意者のみ用紙を回収した。

当日の講義欠席者を除いて、ほぼ受講学生全員の協力が得られた。

### 3. 調査期間

2009年4月～9月

### 4. 結果

結果の集計は、次の視点に立って表1から表4までの4種類の表にまとめた。

なお、それぞれの表の横の欄はA・B・O・AB式血液型の分類で、縦の欄は「血液型別思考パターン特性」の4分類である。

〈表1〉の視点：ABO式血液型と長田の思考パターン分類(a、b、c、d)の一致度をみる。A-a、B-b、O-c、AB-dの欄の数値が他の組み合わせよりも高いほど、血液型と思考パターンの相関が高いことになる。

〈表2〉の視点：4つの思考パターンの最高得点が2つ以上認められ、思考パターンの明確なタイプ分けができないものの出現数をみる。総数が少ないほど、思考パターンのタイプ分けが判然とできることになる。

〈表3〉の視点：思考パターンの最高得点との得点差が2点以下の項目の出現数をみる。出現数が少ないほど、明確なタイプ分けができることになる。

〈表4〉の視点：思考パターンを決定づけた最

高得点の項に含まれる×点の出現数を見る。×点「該当しない」の数が多いほど、最高得点をとった思考パターンの中に矛盾が存在することになる。

それぞれのグループごとの集計結果は以下の通りである。

〈表1-①〉 Iグループ

	A	B	O	AB
a	21	6	5	2
b	1	10	4	2
c	1	1	4	3
d	1	0	5	0

〈表1-②〉 IIグループ

	A	B	O	AB
a	9	9	4	2
b	2	2	2	1
c	3	1	0	1
d	3	0	0	0

〈表1-③〉 IIIグループ

	A	B	O	AB
a	2	0	2	0
b	0	0	1	0
c	2	1	1	0
d	1	0	0	0

〈表1-④〉 IVグループ

	A	B	O	AB
a	7	3	2	2
b	5	2	2	2
c	2	0	2	1
d	1	0	0	0

〈表1-⑤〉 Vグループ

	A	B	O	AB
a	0	1	2	1
b	2	0	1	0
c	0	1	0	1
d	1	0	0	0

<表1-⑥> 全体

\* 「最高得点が2つ以上」を除く

	A	B	O	AB
a	37	19	15	7
b	10	14	10	5
c	8	4	7	3
d	7	0	5	0
計	62	35	37	15

(60.4) (30.2) (45.3) (15.1)

\* 上記 ( ) 欄は日本人の ABO 式血液型の分布割合、A 型：4 割、B 型：2 割、O 型：3 割、AB 型：1 割で算出した期待値

<表2> a b c d の最高得点が2つ存在する数 (3つ以上はない)

	A	B	O	AB
a	12	2	4	3
b	8	2	3	4
c	6	0	4	0
d	4	0	4	2
計	58 (29例)			

<表3> 2点以内の得点差がある項目が存在 (最高得点1つの内)

	A	B	O	AB
a	34	18	17	4
b	8	16	7	1
c	3	3	5	1
d	13	0	6	0
計	124			

<表4> ×点の数 (最高得点1つの内)

	A	B	O	AB
a	20	13	14	2
b	10	9	11	2
c	6	2	9	4
d	11	0	5	0
計	118			

## 5. 考察

サンプル全体の ABO 式血液型と a b c d 思

考パターン的一致については、A-a のマッチングのみに高い一致率が見られるが、B-b、O-c、AB-d においては、他のタイプとのマッチングの方が高い数値を示している。とりわけ O 型から AB 型へと一致率は低くなり、A B 型と d タイプは一致率=0 となっている。

血液型 A と思考パターン a の一致率は、血液型 A の中で占める割合は 59.7% であり、他の血液型における、両者の一致率は、B : b = 40%、O : c = 19%、AB : d = 0% である。

また表 2 に示した、最高点が 2 つ存在する回答結果が出たものが 29 例 (15%) 認められ、二つのパターンに当てはまってしまう者がいて、タイプ分けに矛盾が生じるという問題が明示されている。

表 3 に示した「最高得点との間に 2 点以内の得点差がある回答数」の意味するところは、最高得点で分類された思考パターンとさほど変わらないような別のタイプに属する可能性が高い事例が多数あるということである。このことは、4 つの思考パターンによる分類の信頼性を著しく低下させる要因の一つであると言えよう。

更に、表 4 は思考パターンを決定する決め手となった最高得点を取ったパターンの質問項目に対して「当てはまらない」と回答したものを × 点として集計したものである。

最高点が一つだけであった 151 の回答の中に 118 の × 点が計上されており、あるパターンに該当してもそのパターンを構成する特性に当てはまらないものがあるということであり、この結果も信頼性を低下させる大きな要因といえる。

血液型と思考タイプの相関性は、いずれの血液型も思考パターン a、b、c、d の順にマッチング率が低下している。しかも、a、b、c、d 思考パターンの各血液型を通しての合計数は、a = 78、b = 39、c = 22、d = 12 と、段階的に明確な数値の差が見られる。このことからすると、血液型とは関係なしに、現代社会を構成する人々 (本研究に限って言えば主として女子学生) の思考パターンを、一般的に見られるものから希なものへと順に 4 つのグループ分

けを行って、血液型と対応させたに等しいことになる。

「怖いくらい当たる（検証対象の本にはどのくらい当たれば怖いのかの規準は示されていないが）」とすれば少なくとも90%程度の一致率がなければ、そのようなことは言えないであろう。ましてや、適職の選択やビジネスの上での人付き合いの方法にまで応用することをすすめていることからすれば、これを鵜呑みにすれば社会的な不利益を被る可能性があることも当然心しておかなければならない。

この種の偽科学説は単なるエンターテインメントとしておもしろおかしく話題にする分にはさして害はないかも知れないが、この問題に真摯に向き合っている科学者達が心配しているように、正常な判断力を放棄して流行の偽科学説に乗ってしまうことの危険性を強調しておかなければならない。

インターネットなどのメディアの発達によって、様々な勧誘情報が精神の奥深くまで侵入してくる時代状況になってきており、それに伴う被害も拡大し、深刻化している。

人間科学に関わる立場にある大人は特に、機会あるごとに青少年に注意を喚起し、正常な判断力を養うよう心掛けることが求められている。

ましてや、短大や大学で学生を教育する立場にある教員は、偽科学による新しい迷信に学生が染まらないように、人間科学の視点を磨きつつ啓発に努めることが必要であろう。

#### 参考文献

- 1, 草野直樹 「血液型性格判断のウソ・ホント」  
かもがわ出版 2001
- 2, 大村政男 「新訂 血液型と性格」  
福村出版 1998
- 3, 能見正比古 「血液型で人間を知る本」  
青春出版 1979
- 4, 能見俊賢 「血液型でわかる性格ガイド」  
新星出版社 2000
- 5, 長田時彦 「怖いくらい当たる『血液型』の本」  
三笠書房 2005

性格類型診断テスト

評価基準：ピッタリ当てはまる=◎=2点 : だいたい当てはまる=○=1点  
 : どちらともいえない=△=0点 : 当てはまらない=[×点]

	回答	配点
1, 人と話しているときに話があちこちに飛んでしまう、話題をよく変える		
2, 一つのことに集中するのが苦手で、飽きっぽい、気が変わりやすい		
3, 物事を理論的に考えることが苦手で、感覚や経験からくる勘にたよる		
4, 理屈抜きで親身になって人とつきあう優しさを持っている		
5, 普段はまじめで我慢強いが、限界を超えると極端にキレる、開き直る		
6, 今までの経験を生かす応用に強いが、一から何かを作り上げるのは苦手		
7, 飽きっぽい、気が変わりやすい		
8, 何かの説明をするとき、前置きが長く、結論を最後に回してしまう		
[×点] : ( ) a小計		
1, 一度一つのことを考え始めると、あたりが見えなくなる		
2, 考えを集中させ、理論的にまとめていくのが得意		
3, 何かの拍子に興味を失うと対象が何であれ、極端に熱が冷めてしまう		
4, 自分の考えに執着し、一途でマイペース		
5, 思っていることを率直に表現し、白黒をはっきりつけたがる		
6, 精神的に崩れるとなかなか立ち直ることができない		
7, 興味のないことには見向きもしないため自分勝手だと思われがち		
8, 会話をしている周囲がどう思おうがお構いなしに同じ話題で話を続ける		
[×点] : ( ) b小計		
1, 自分の考えを曲げるのが大嫌いだ、けんか腰にならずに対処できる		
2, 自分の心に他人が入り込まないように、高い壁を張りめぐらす		
3, 人当たりはいいけれど、本音をなかなか見せない		
4, 対人関係は表面的で幅広いつきあい方をする		
5, 聞き上手で本音を言わないために、おおらかな印象を人に与える		
6, 全体をさっと捉えるのが上手で見極めも早く、アバウトにみられる		
7, 物事を客観的に見る思考パターンを持っていて、怒っても頭の中は冷静		
8, 一度攻撃的になると相手に逃げ場を与えず徹底的にたたきめす		
[×点] : ( ) c小計		
1, 思考は一つのことに集中しやすいが、発想の切り替えもすぐできる		
2, 自分の考えにこだわらず、感情にも流されず、冷静に物事に対処できる		
3, 冷静で物おじしない、しかも出しゃばらずに行動する		
4, 表現はいつもストレートで、思ったらそのまま口にしてしまう		
5, 緊張する場とリラックスできる場では別人のように行動が豹変する		
6, ちょっと壁にぶつかるとうすぐに方向転換し、あきらめがいい		
7, 自分の考えにこだわらず自由に発想できる		
8, 「いいかげんだ」と他人から評価されるような行動をとることが多い		
[×点] : ( ) d小計		
得点 A ( ) B ( ) C ( ) D ( )		型